

想起意図が想起される出来事の特定性に与える影響

The effect of the retrieval intention on the specificities of retrieved events

雨宮有里* 高史明** 関口貴裕***

Yuri Amemiya Fumiaki Taka Takahiro Sekiguchi

自伝的記憶 (autobiographical memory) とは過去の自己にかかわる情報の記憶である (佐藤, 2008)。この自伝的記憶には“夏休みに海遊館でジンベイザメを見て感動した”のように内容が詳細な個人的記憶や“昔はよく水族館にいった”のように概括的な出来事の記憶など、さまざまな抽象度の記憶が含まれる (Brewer, 1986; 総説として佐藤, 2008)。自伝的記憶と類似の概念にエピソード記憶 (episodic memory) があるが、エピソード記憶が過去の経験のうち時間と場所の情報が付随しているものをさすのに対し、自伝的記憶はより抽象度の高い経験も含んでいる。そのため、自伝的記憶はエピソード記憶よりも広い概念であるといえる。

この自伝的記憶の想起形態は、想起意図の有無により意図的想起 (voluntary remembering, あるいは voluntary memory) と無意図的想起¹ (involuntary remembering, あるいは involuntary memory) の2種類に分類できる (Berntsen, 1996)。意図的想起とは、出来事を思い出そうという意図を持って記憶検索を開始するものであり、夏休みに何をしていたかと友人に問われ、該当する出来事

を想起するなどがこれにあたる。一方、無意図的想起とは、出来事を思い出そうという意図がない状態で検索が開始される想起形態である。例として、昔よく聴いていた音楽を耳にすることで、当時の出来事がふと思い出されるといった現象があげられる。自伝的記憶の先行研究では、主に前者の意図的想起についてその性質や機能などが検討されてきた (総説として佐藤, 2008)。しかし、無意図的想起は意図的想起と同様、我々が日常的に経験している想起形態であり (神谷, 2008)、意図的想起だけを対象に研究を行うことは、一側面のみを取り上げて自伝的記憶一般の性質について論じることになりかねない。そのため、近年無意図的想起についての検討も行われるようになってきた (雨宮・関口, 2004, 2006; Berntsen, 1996, 1998; Berntsen & Hall, 2004; 神谷, 2003)。これらの研究の多くは日誌法 (diary method) を用いて自伝的記憶の無意図的な想起のデータを収集し、その想起手がかかりや生起状態の性質について検討を行っている (e.g., Berntsen, 1996)。日誌法とは、日常生活の中で何らかの出来事を思い出した際にその内容や想起の状況などを実験参加者が記録していく方法である。その結果、無意図的想起は何ら刺激のないところで生起するのではなく、想起のきっかけとなるような外的な刺激が存在することや (Berntsen, 1996)、意識が集中していない

* あめみや・ゆり

埼玉大学教養学部非常勤講師, 認知心理学

** たか・ふみあき

神奈川大学人間科学部非常勤講師, 社会心理学

*** せきぐち・たかひろ

東京学芸大学教育心理学講座准教授, 認知心理学

状態で生じやすいことなどが見出されている (Berntsen & Hall, 2004; 神谷, 2003)。

この無意図的想起と意図的想起とは、単に想起意図の有無が異なるというだけでなく、想起される内容や想起のメカニズムが異なる可能性が指摘されている (Berntsen, 1998; 神谷, 2003)。そして、先行研究では、その想起メカニズムの違いを検討するために、意図的想起と無意図的想起の間で想起された出来事の特異性 (specificity) の比較を行ってきた (Berntsen, 1998; Berntsen & Hall, 2004; Schlagman & Kvavilashvili, 2008)。想起された出来事の特異性とは、ある出来事に固有の情報に想起内容にどのくらい多く含まれているかを表すものである。例えば“夏休みに海遊館でジンベイザメをみて感動した”のように、ある日・ある時の経験に固有の情報を多く含む想起内容は特異性が高いと判断される。一方、例えば“昔はよく水族館にいったものだ”のように出来事に固有の情報を含まない概括的な想起内容は特異性が低いと判断される。

この想起された出来事の特異性は、自伝的記憶の貯蔵・検索に関するモデルである階層構造モデル (hierarchical knowledge structures model; Conway & Pleydell-Pearce, 2000, Conway, 2005) のなかでどのように検索が行われたかを表す指標として用いられてきた。このモデルでは、自伝的記憶は様々な特異性の情報が階層構造を築く形で貯蔵されていると考える。最も特異性の低い抽象的な情報は、自分の人生における様々なテーマ (例：小学校のころ) に関するものであり、その下層の中程度の特異性の階層の情報としては出来事の一般的な内容 (例：水族館に遊びに行ったこと) が貯蔵されている。そして最も特異性の高い情報の階層には、それぞれの出来事に固有の情報として出来事の詳細 (例：ジンベイザメに感動) が貯蔵されている。このモデルでは、過去の出来事を意図的に想起する場合、

特異性の低い階層から高い階層へと検索を進めると考えられている (Conway & Pleydell-Pearce, 2000)。実際、Williams & Broadbent (1986) は、過去の出来事を想起しようという意図があると、実験参加者はなるべく特異性の高い情報を想起しようとすることを示している。しかしながら、必ずしも全ての検索が特異性の高い情報の階層までたどり着くわけではなく、途中で検索が終了した場合は、特異性が低い、もしくは中程度の出来事が想起される。したがって、想起された出来事の特異性は、抽象的な情報の階層からどの階層まで検索が進んだかを反映すると考えられるのである。

では、意図的想起と無意図的想起とは、想起された出来事の特異性はどのように異なるのだろうか。先行研究の多くは、無意図的想起の方が意図的想起に比べ特異性の高い出来事が想起されると報告している (Berntsen, 1998; Berntsen & Hall, 2004; Schlagman & Kvavilashvili, 2008)。例えば、Berntsen (1998) や Berntsen & Hall (2004) は、意図的想起のデータを手がかり語法 (cue-word method; 刺激語を手がかりとして、過去の出来事の想起を求める方法) で、無意図的想起のデータを目録法でそれぞれ収集し、無意図的想起のほうが意図的想起の場合よりも特異性の高い出来事が多く想起されるという結果を得ている。また、Schlagman & Kvavilashvili (2008) は、実験室における長時間の単純な課題中、実験参加者に無意図的想起の生起に気がいたら報告させるという手続きで無意図的想起のデータを収集し、それを手がかり語法による意図的想起のデータと比較しているが、そこでも無意図的想起のほうが、意図的想起よりも特異性の高い出来事が想起されていることを報告している。

先に述べたように、意図的想起の場合、参加者は出来るだけ特異性の高い情報を検索しようとする (Williams & Broadbent, 1986)。一方、無

意図的想起ではその性質上、そうした意図はない。それにもかかわらず、無意図的想起のほうが意図的想起に比べ特定性の高い情報が想起されるという結果について、先行研究では2通りの説明がなされている。まず Berntsen (1998) では、意図的想起と無意図的想起とでは、検索時にアクセスする記憶プールが異なっており、無意図的に想起される出来事は特定性の高い情報のみが貯蔵されている記憶プールから検索されるのに対して、意図的想起では様々な特定性の情報が貯蔵された記憶プールから出来事が検索されると想定されている。一方、Berntsen & Hall (2004) はその後の論文において、意図的想起と無意図的想起とでは同じ記憶プールから出来事が検索されるが、検索が開始される情報の階層が異なると説明している。この説明では、まず、意図的想起の場合、想起手がかりの呈示を受けて、それに応じた様々な特定性の階層から情報の検索が始まり、その後、特定性の高い情報の階層へと検索がすすむ。だが、この検索が全て特定性の高い出来事の階層へと到達するわけではない (Conway & Pleydell-Pearce, 2000)。一方、無意図的想起が生じるのは主に特定性の高い自伝的情報に関連した想起手がかりに出会った時であり、それにより、特定性の高い情報が保持された階層から、出来事が直接的に検索される。このため、無意図的想起の方が意図的想起よりも想起される出来事の特定性が高くなると考えられるのである。このように、先行研究では無意図的想起のほうが意図的想起よりも特定性の高い出来事が想起されるという結果を、意図的想起と無意図的想起とでは検索時にアクセスする記憶プールが異なる、ないしは検索時にアクセスする特定性の階層が異なると説明している。

しかしながら、これらの先行研究 (Berntsen, 1998; Berntsen & Hall, 2004, Schlagman &

Kvavilashvili, 2008) には、共通した方法論上の問題が存在する。これらの研究では、実験室や日常生活で、実験参加者が出来事の想起の有無を長時間モニタリングし、無意図的想起の生起に気がいたらそれを報告するよう求めている。その手続きでは、かなり長い時間、背景課題の刺激 (Schlagman & Kvavilashvili, 2008) や日常的な活動 (Berntsen, 1998, Berntsen & Hall, 2004) に意識を向けた状態で、無意図的想起の生起に気づくことが求められる。しかしながら、無意図的想起はとても自然で瞬間的な現象であるため想起したことに気が付かないことが多い (神谷, 2003, 2008)。したがって、このような手続きで報告されるものの多くは、想起したことがかなり強く意識される出来事であり、一方で想起されたことに気がつかない出来事や、報告に値しないと判断され報告されなかった出来事も多く存在することが考えられる (Berntsen, 1998)。そして、このように鮮明な想起意識を伴わない内容は、主に特定性の低い出来事や漠然とした内容のものかもしれない。実際、Berntsen & Hall (2004) は、特定性の高い出来事は、特定性の低い出来事よりも鮮明な想起意識を伴うことを示している。一方、意図的想起の場合は、想起された出来事をすべて報告するよう教示するため、想起された出来事のうち特定性の高い出来事ばかりが報告される可能性は低いであろう。もしこれが正しいなら、無意図的想起の方が意図的想起よりも特定性の高い出来事が想起されるという先行研究の結果は、これら2つの検索過程の違いを反映したものではなく、想起内容の報告されやすさの違いを反映していたということになる。すなわち、意図的想起では特定性の高い出来事も特定性の低い出来事も同様に報告されるのに対し、無意図的想起では、その方法論上の問題から特定性の高い出来事だけに報告が偏ってしまったのかもしれない。したがっ

て、想起された出来事の特定性を指標に両想起形態で検索過程に違いがあるかを検討するためには、無意図的想起のデータを特定性の高低にかかわらず偏りなく報告可能な手続きで収集する必要がある。

そこで、本研究では、想起された内容の報告に偏りが生じにくい方法として、実験的手法で無意図的想起の性質について検討した雨宮・関口 (2004, 2006) を改良した手法を用いる。この手続きでは、まず実験参加者に自伝的記憶の無意図的想起を引き起こす手がかり語 (例: 友人) に対し、それと告げずにダミー課題 (例: 単語の親密性評価課題など) を行わせる。次に、ダミー課題のすぐ後に実験者の指示によって課題中に過去の出来事の想起が起こっていたか否かをふりかえらせ、想起があった場合、それをすべて報告させる。先行研究 (Berntsen, 1996, Berntsen & Hall, 2004; Schlagman & Kvavilashvili, 2008) のように、実験参加者が無意図的想起の生起に気がついた場合にそれを報告する手続きでは、鮮明な想起意識と伴うものに報告が頼る可能性がある。これに対し、本研究の方法では、実験者による外的な指示によって直前に頭に浮かんでいた内容に意識を向けさせ、それを報告させる。課題遂行中の無関連思考であるマインドワンダリング (mind wandering) の性質について調べた研究では、実験参加者自らが無関連思考の生起に気がついてそれを報告する場合よりも、実験者の指示によって無関連思考に気がつかせる場合のほうが、想起内容や想起の有無をより確実に検出できることが示されている (e.g., Smallwood & Schooler, 2006)。したがって、本研究でも、これまでの方法では報告されなかった想起意識の弱い出来事を含め、無意図的想起された内容を偏りなく報告させることが可能であろう。

また、本研究では雨宮・関口 (2004, 2006) の方法に次の3点で改良を加えた。まず、本研究

では無意図的想起の想起手がかりを1語とし、報告時にはそれを再提示しないという方法を用いた。無意図的想起を実験的に生起させた雨宮・関口 (2004, 2006) では、1つの冊子で4語の想起手がかりを呈示し、評定の終了後にそれぞれの語を示し、最初に想起手がかりを見た際に自伝的記憶が想起されたかを報告させている。しかしながら、この方法では報告時に再呈示された想起手がかりから過去の出来事が無意図的に想起され、それを最初に想起手がかりを見た際に想起したものと混同する可能性がある。かといって、複数の想起手がかりを用いながら、報告時に想起手がかりを再提示しないと、実験参加者はどの単語から想起された自伝的記憶を報告すればいいのかが分からない。同様の問題は、単語連想課題で無意図的想起を生起させた後、自らの連想内容を再呈示し課題中の無意図的想起の有無を報告させた Ball (2007) にも存在している。そこで、本研究では呈示する単語を1語とし、無意図的想起の報告時に想起手がかりを再提示しなかった。

さらに、本研究では自伝的記憶について調べていることが実験参加者に分からない状態で、出来事の想起があったか否かを調べるという手続きを用いた。より具体的には、出来事を想起したかを直接問うのではなく、ダミー課題中に頭に浮かんでいたことを全て報告させ、その中に自伝的記憶があった場合は分析対象とした。雨宮・関口 (2004, 2006) では“先ほど課題を行っていただきましたが、その際に過去に経験した出来事を思い出しましたか?”という質問文を用いてダミー課題中に出来事が想起されたかを報告させている。しかしながら、この手続きでは自伝的記憶について調べていることを実験参加者が理解した上で、それが想起されたか否かを回答させることになる。そのため、実験参加者によっては、ダミー課題時には自伝的記憶

を想起していないのに、要求特性に添う形で報告時に出来事を想起し、それをダミー課題時に想起したものと誤って認識してしまった可能性がある(雨宮・関口, 2006)。そのため本研究では自伝的記憶について調べていることが実験参加者に分からない状態で、意識に浮かんでいたことを全て報告させ、その中に自伝的記憶があった場合には分析対象とした。

また、本研究では無意図的想起が生じた直後にその内容を報告させた。雨宮・関口(2004, 2006)では、無意図的想起の生起から報告までに数分の遅延時間があるが、その間に想起の事実や想起内容を忘れてしまい、それが結果に影響を与えた可能性がある。例えば、無意図的想起の生起から数分ないしは十数分後に無意図的想起のデータを収集した Ball(2007)では、意図的および無意図的想起に想起された出来事の特異性に差がないという結果が得られているが、自らの手続きの問題点として、無意図的想起の生起直後にデータを収集しなかったために、実験参加者が想起内容を忘れてしまった可能性を指摘している。そのため、本研究では無意図的想起誘発課題の直後にその生起の有無や想起内容の報告を求めた。

以上のように、本研究では想起された出来事を偏りなく報告可能な手続きを用い、無意図的想起においてどのような特異性の出来事が想起されるかを検討する。そして、その結果を同じ想起手がかりから意図的に想起された出来事の特異性と比較することで、無意図的想起と無意図的想起とで想起された出来事の特異性がどのように異なるかを明らかにする。

方 法

実験参加者

無意図的想起条件の実験参加者数は 212 名(男性 135 名・女性 76 名・不明 1 名)であり、

意図的想起条件の実験参加者数は 79 名(男性 49 名・女性 30 名)であった。両条件で人数が異なるのは、無意図的想起条件は想起率が低く(雨宮・関口, 2006)、無効データが多いと予想したためであった。実験への参加は匿名で行われ、実験参加者は配布された質問紙の種類によりいずれかの条件に無作為に割り当てられた。

刺激

本研究は想起意図の有無と想起された出来事の特異性との関係について先行研究(Berntsen, 1998; Berntsen & Hall, 2004; Schlagman & Kvavilashvili, 2008)と結果の比較を行うという目的があったため、これらと同様、想起手がかりに単語を用いた。まず、先行研究(Berntsen, 1998; Berntsen & Hall, 2004)から“電話・友人・先生・CD”という単語を想起手がかり候補として選択した。また先行研究では“ポスター”も想起手がかりとして有効であったが、この単語では、関連する出来事の経験頻度に大きな個人差があることが予想された。そこで“ポスター”と類似しているが、関連した出来事の経験頻度の個人差がより少ないと考えられる“写真”を候補とした。さらに Berntsen(1998)で使用された“電車を待っているとき”という想起手がかりより、“電車”を想起手がかりの候補とした。その上で、これらの手がかり候補が自伝的記憶の想起に有効であるかを調べるため、本実験とは別の 20 名を対象に、手がかり候補 6 語から自伝的記憶の意図的想起を求めた。その結果、全ての参加者から単語に関連する出来事の想起が得られた。以上のことから、本研究では“電話・友人・先生・CD・写真・電車”の 6 語を想起手がかりとして使用した。

質問紙

無意図的想起条件 想起手がかりを呈示し、それに対する想起内容を報告するための質問紙を冊子形式で作成した。冊子には、まずダミー

課題である単語の親密性評価課題（無意図的想起誘発課題）の教示文“ある言葉があなたにとってどのくらい身近なものかを、調べるものです。言葉をどのくらい見たり聞いたり、使ったりするかを考えて言葉の身近さを評価してください”が印刷されており、次のページの中央に無意図的想起を誘発する想起手がかり（例：友人）が1語印刷されていた。想起手がかりは、1つの冊子について6語中の1語のみを用いた。想起手がかりの次のページでは、単語の親密性評価を行っていた間に意識にのぼった内容の報告を求めた。ページの上部には質問文として“評価課題をしているあいだに、どのようなことが頭に浮かびましたか？ 思い浮かんだ内容の数字に○をつけてください。複数のことが思い浮かんだ場合は、すべてに○をつけてください”が印刷されており、その下に回答用の7つの選択肢およびそれぞれの具体例が印刷されていた（1. 過去の出来事やその一部のイメージ／自分が過去に経験した出来事やその一場面など、2. これから行くこと／次の講義のことや明日の予定・来週の予定など、3. 現在の自分の状態／お腹がへった・眠たいなど、4. 単語の身近さ／単語をどのくらい見たり・聞いたり・使ったりするか、5. 単語の意味／単語の定義など、6. その他、7. 特になし）。

次のページは、自伝的記憶の想起（選択肢1）があった参加者のみを対象にその想起内容の特定性を問うものであった。一番上に“これ以降の質問項目には過去の出来事やその一部のイメージが頭に浮かんだに○をつけた方のみお答えください”という文が印刷されており、その下に、想起された内容の特定性の評価を求める質問文“思い浮かんだ内容は、ある日・ある場所で経験した特定の出来事でしょうか？ 過去の経験ではあるけれども、特定の出来事ではないものですか？”と、特定性の評価に関する3つ

の選択肢（ある日・ある場所で経験した特定の出来事／例：小学校3年のとき初めてSMAPのCDを買った時のこと、ある日・ある場所のことではなく、何度か経験した出来事がまとまったもの／例：CD屋でよくCDをレンタルしたこと、過去に経験したことだが、出来事ではないもの／例：先生や友人の顔、昔買ったCD）が印刷されていた。これらの選択肢は、Baddeley & Wilson（1986）の特定性評価基準を参考に作成した。また、同じページには、回答上の注意として、複数の出来事を想起した場合には初めに想起した内容について評価する事、および課題中に頭に浮かんだ出来事についてこの場で改めて思い出すことがないように求める文章が印刷されていた。そして、最後のページには、操作チェックのために、想起意図の有無を問う質問とそのため選択肢（何か思い出そうという意図はなかったが、自然に頭に浮かんできた／何か思い出そうという意図があって思い出した）が印刷されていた。

意図的想起条件 意図的想起条件の冊子は無意図的想起条件のものと以下の点を除き同じであった。まず、最初のページは、無意図的想起を誘発するダミー課題の教示の代わりに、出来事の意図的想起を求める教示として先行研究（Berntsen, 1998; Berntsen & Hall, 2004; Schlagman & Kvavilashvili, 2008）と同様“単語に関連する、あなたが過去に経験した出来事を思い出してください”と印刷されていた。また、意識にのぼった内容の報告を求めるページは“出来事の想起課題をしているあいだに、どのようなことが頭に浮かびましたか？ 思い浮かんだ内容の数字に○をつけてください。複数のことが思い浮かんだ場合は、すべてに○をつけてください”という教示文が印刷されていた。上記以外は無意図的想起条件の冊子と同じであった。

手続き

実験は授業時間内に集団形式で行った。実験参加者は、配布された冊子により無意図的想起条件・意図的想起条件のいずれかに無作為に割り当てられた。一人の実験参加者に呈示する想起手がかりは両条件とも6語のうち1語であり、配布する冊子の種類を変えることで無作為に割り当てた。実験参加者には、両条件ともに、実験の目的を成人の認知機能の調査であると説明し、記憶の実験であることは伝えなかった。実施方法の説明後、無意図的想起条件の実験参加者は単語の親密性評定課題を、意図的想起条件の実験参加者は単語から過去の出来事を想起する課題をそれぞれ質問紙の教示文の指示により行った。課題を行う時間は、両条件ともに20秒であり、実験者が課題の開始と終了、およびページをめくるタイミングを口頭で指示することで統制した。それぞれの課題終了後、ページをめくるよう口頭で伝え、実験参加者に課題を行っている間に意識にのぼっていたことを回答するよう質問紙の教示文で求めた。また以降の質問には、実験参加者各自のペースで回答を行うよう、口頭で指示をした。全ての実験参加者の回答が終了した後、デブリーフィングとして、実験の目的および、記憶の実験であることを伏せて協力を依頼した理由について口頭で説明した。実験時間は各条件ともに約15分であった。

結 果

出来事の想起率

分析に先立ち、性別以外の回答の記入がなかった無意図的想起条件の実験参加者1名のデータを欠損値とし除外した。両想起条件ともに、課題中に意識にのぼった内容を問う質問に対し、“1. 過去の出来事やその一部のイメージ”を選じた場合に、出来事の想起があったとみなした。その結果、無意図的想起条件で出来事の想

起があったものは211名中120名であった。このうち、7名の参加者では、出来事を意図的に思い出したかを問う質問で回答がなく、出来事が無意図的に想起されたかが判断できないため、分析対象から除外した。また、同じ質問で“何か思い出そうという意図があつて思い出した”と報告したものが21名おり、これらについては無意図的想起がおこらなかったとみなした。以上の結果、無意図的想起条件において無意図的想起がおこったとみなされたのは92件(男性51, 女性41)となり、有効データ(204件)に対する無意図的想起率は45.1%となった。一方、意図的想起条件は全参加者より出来事の想起を得た。このうち、想起意図の有無を問う質問で“何か思い出そうという意図はなかったが、自然に頭に浮かんできた”と報告したのが22名おり、これらの参加者では出来事の意図的な想起がおこっていないとみなした。その結果、意図的想起条件において、出来事が意図的に想起されたとみなされたものは57件(男性34, 女性23)であり、意図的想起率は72.2%となった。

想起された出来事の特異性

無意図的想起条件で無意図的想起が起こったとみなされた92件の出来事、意図的想起条件において出来事が意図的に想起されたとみなされた57件の出来事について、その特異性の分析を行った。そのためにまず、想起された出来事の特異性の評価で“ある日・ある場所で経験した特定の出来事”と回答された場合に特異性の値として3を、“ある日・ある場所のことでなく、何度か経験した出来事がまとまったもの”と回答された場合に2を、“過去に経験したことだが、出来事ではないもの”と回答された場合に1をそれぞれ割り当てた。これらの値は、数値が大きいほど想起された出来事の特異性が高いことを意味する。特異性の値ごとの想起数をTable 1に示す。無意図的想起条件では想起された出来

Table 1 無意図的・意図的想起条件における想起された出来事の特定性のカテゴリごとの想起数

想起条件	想起された出来事の特定性のカテゴリ (特定性の値)		
	過去に経験したことだが出来事ではないもの (1)	ある日・ある場所の出来事ではなく、何度か経験したことがまとまったもの (2)	ある日・ある場所で経験した特定の出来事 (3)
無意図的想起	39	37	16
意図的想起	13	13	31

事のうち特定性の値 1, 2 のものが多く、一方、意図的想起条件では 3 のものが最も多くなっていた。特定性の値の中央値は、無意図的想起条件が 2、意図的想起条件が 3 であった。両想起条件の間で特定性の値の中央値に差があるかについて *U* 検定を行ったところ、意図的想起条件の特定性の中央値が、無意図的想起条件のそれに比べ、有意に高くなっていた ($U = 1639.0, p < .01$)。したがって、意図的想起条件のほうが、無意図的想起条件よりも、特定性の高い出来事が多く想起されたと言える。

また、想起された出来事の中で真に特定性の高い出来事と言えるのは、特定性の値が 3 のものであるため、特定性の値 1 および 2 の出来事を“概括的な出来事”、特定性の値 3 の出来事を“特定の出来事”と分類しなおし、想起条件間でこれらの出来事の割合に差があるかを調べた。その結果、無意図的想起条件では、概括的な出来事の割合は 82.6%、特定の出来事の割合は 17.4% であり、意図的想起条件では概括的な出来事の割合は 45.6%、特定の出来事の割合は 54.4% であった。両想起形態の間で、特定の出来事の割合に差が見られるかを χ^2 検定で調べたところ、1%水準で有意差がみられた ($\chi^2 (1, N = 149) = 22.3, p < .01$)。残差分析の結果、無意図的想起条件では概括的な出来事の割

合が期待値よりも有意に多く、特定の出来事は有意に少なかった。一方、意図的想起条件では特定の出来事の割合が期待値よりも有意に多く、概括的な出来事の割合は有意に少なかった (それぞれ $p < .05$)。

考 察

本研究では、手がかり語に対するダミー課題で自伝的記憶の無意図的想起を誘発するという手続き (雨宮・関口, 2004, 2006) を用いて、無意図的に想起された出来事の特定性を意図的に想起された出来事のそれと比較した。その結果、意図的想起のほうが無意図的想起よりも特定性の高い出来事が多く想起された。これは無意図的想起のほうが意図的想起に比べて特定性の高い出来事が多く報告された先行研究 (Berntsen, 1998; Berntsen & Hall, 2004; Schlagman & Kvavilashvili, 2008) とは反対の結果である。これらの先行研究のうち Berntsen (1998) や Berntsen & Hall (2004) は、日常生活の中で出来事が無意図的に想起されたらそれを記録するという方法で無意図的想起条件のデータを収集している。また、Schlagman & Kvavilashvili (2008) は長時間の単純な課題中に無意図的想起に気がついた場合にはこれを報告させ、無意図的想起のデータを収集している。しかしながら、これらの手

続きは、実験参加者が自ら無意図的想起の存在に気がつき、それを報告する手続きである。そのため、無意図的想起のうち想起意識の強い出来事に報告が偏っていた可能性がある。これに対し、本研究では、外的指示によって直前のダミー課題遂行中に意識にのぼっていたことはすべて報告させている。課題に無関連な思考であるマインドワンダリングについて調べた Smallwood & Schooler (2006) は、実験参加者が自ら無関連思考に気がついて報告する場合よりも、実験者の指示によって無関連思考を報告させる場合のほうが、この思考を偏りなく検出できることを報告している。そのため、無意図的想起に気がついたら報告するという先行研究の手続きよりも、実験者の指示によりこれを報告させる本研究の手続きのほうが、想起された内容を偏りなく収集できると考えられる。以上のことから、意図的想起のほうが無意図的想起よりも特定性の高い出来事が想起されるという本研究の結果は、先行研究の結果よりも妥当性の高いものであるといえる。

では、意図的想起のほうが無意図的想起よりも特定性の高い出来事が多く想起されるという本研究の結果から、両想起形態の検索過程はどのように説明可能だろうか。Berntsen (1998) は、無意図的想起のほうが意図的想起よりも特定性の高い出来事が想起されやすいという結果を説明するために、無意図的に想起される出来事と、意図的に想起される出来事とでは、それぞれが貯蔵されている記憶プールが異なるのではないかと述べている。すなわち、無意図的想起では特定性の高い情報が貯蔵されている記憶プールから出来事が検索され、意図的想起ではさまざまな特定性の情報が貯蔵されている記憶プールから出来事が検索されると想定している。また、Berntsen & Hall (2004) は、意図的想起と無意図的想起は同じ記憶プールから出来事が

検索されるが、検索が開始される階層が異なると説明している。まず無意図的想起では、特定性の高い情報に合致した想起手がかりが呈示されると、特定性の高い情報が貯蔵されている階層から出来事が直接検索される。一方、意図的想起では、様々な特定性の出来事と結びついた想起手がかりから検索が行われ、特定性の高い情報の保持されている階層へと進んでいくが、全てが特定性の高い情報が保持されている階層まで到達するわけではない。以上のことから無意図的想起のほうが意図的想起より特定性の高い出来事が想起される。

しかしながら、これらはいずれも無意図的想起のほうが意図的想起よりも特定性の高い出来事が想起されるという結果を説明するために考えられた仮定である。そのため、本研究の結果の説明において、必ずしも上記の仮定を用いる必要はないであろう。

では、本研究の結果から意図的および無意図的想起の検索過程について、どのように説明できるだろうか。まず、本研究では想起比率の違いはあるものの、両想起条件ともに、特定性の低い出来事も高い出来事も想起されている。そのため Berntsen (1998) のように、両想起形態で特定性の異なる情報が貯蔵された記憶プールを仮定する必要はなく、Berntsen & Hall (2004) や Schlagman & Kvavilashvili (2008) 同様、両想起形態ともに同じ記憶プールから出来事が検索されると考えたほうがよいだろう。その上で本研究の結果は、階層構造モデル (Conway, 2005) から次のように説明できる。

まず、本研究では、想起手がかりとして単語が用いられている。この単語 (例: 友人) が表す概念情報は、友人 A との旅行や友人 B とのけんかのように、友人と経験した様々な出来事の記憶に含まれているであろう。そのため、単語が呈示されると、これをうけて意図的想起、無

意図的想起とともに、さまざまな出来事と結びついた情報、すなわち、特定性の低い情報が貯蔵されている階層の表象が活性化し、検索が開始される(雨宮・高・関口, 2011)。その上で、意図的想起では、はじめに検索が開始された階層から特定性の高い情報にむかって能動的な検索が行われる(e.g., Conway & Pleydell-Pearce, 2000)。一方、無意図的想起の場合は、出来事を想起するという意図がないため、意図的想起のように特定性の高い情報へと能動的な検索はおこなわれずに、はじめに検索が開始された階層から情報がそのまま意識にのぼるのではないだろうか。もし、そうであるならば、無意図的想起条件では“友人”や“先生”のように多くの出来事と結びついた単語が想起手がかりとして用いられたため、特定性の低い階層から検索が始まり、特定性の低い内容がそのまま意識に上ったと説明できる。そして、その結果として、意図的想起のほうが無意図的想起に比べ、特定性の高い出来事が想起されたのではないだろうか。すなわち、意図的想起と無意図的想起では、Berntsen & Hall (2004) が考えていたように、それぞれ異なる階層から検索が開始されるのではなく、同じ想起手がかりにより、同じ階層から検索が開始されるが、検索開始後の能動的な検索の有無により、その後、どこまで検索が進むのかが異なると考えることで本研究の結果を説明できる。

このように、本研究の結果は意図的想起と無意図的想起とで同じ階層から検索が開始され、その後の能動的な検索の有無が異なると考えることで説明が可能である。

では、本研究の結果を、意図的想起では特定性の高い情報が保持されている階層から出来事が直接想起されると考えることで説明できないだろうか。Berntsen & Hall (2004) は、無意図的想起のほうが意図的想起よりも特定性の高い

出来事が想起された理由として、特定性の高い情報に合致する想起手がかりが呈示された場合に、その情報が保持されている特定性の高い階層から出来事が直接的に想起されると説明している。本研究の結果も意図的想起では特定性の高い情報と結びついた想起手がかりが呈示された場合にのみ、その情報が保持されている階層から出来事が直接想起され、無意図的想起では特定性の低い情報が保持されている階層から出来事が想起されると説明できないだろうか。しかしながら、このように考えた場合、意図的想起と無意図的想起で同じ想起手がかりを用いているのに、なぜ検索が開始される階層が異なるのかの説明が難しい。また、意図的想起では常に特定性の高い情報が保持されている階層から出来事が直接的に想起されるという説明は、先行研究(e.g., Conway & Pleydell-Pearce, 2000)の説明、すなわち、意図的想起では、はじめに検索が開始された階層から特定性の高い情報が保持されている階層へと能動的な検索が行われるという説明と矛盾する。このように考えると、本研究の結果は、意図的想起では特定性の高い情報が保持されている階層から出来事が直接想起されると考えるよりも、両想起形態とも同じ階層から検索が開始されるが、その後の能動的な検索の有無により、想起される出来事の特定性が異なると考えたほうが説明しやすいだろう。

では、先行研究(Berntsen, 1998; Berntsen & Hall, 2004; Schlagman & Kvavilashvili, 2008)で報告され、本研究でも一部見られた特定性の高い出来事の無意図的想起は、どのように説明が可能だろうか。本研究では、無意図的想起は特定性の低い情報が保持されている階層からも検索が起こると説明したが、これはBerntsen & Hall (2004)のように、特定性の高い情報が保持されている階層から出来事が無意図的に想起されることを否定するものではない。実際、雨宮・

高・関口（2011）では、少数の特定の出来事（卒業式）と強く結びついた想起手がかり（卒業式でうたった曲）が提示されると、無意図的想起でも意図的想起と同様、特定性の高い出来事が想起されるという結果が得られている。また、Ball, Mace, & Corona（2007）や Schlagman, Kvavilashvili, & Schulz（2007）では、ある特定の出来事（例：はじめてデートした日は桜が咲いていた）の中心的特徴（例：桜が咲いていたこと）と一致する想起手がかり（例：桜）が提示されると、特定性の高い出来事が無意図的に想起されることを示している。このように、少数の特定の出来事や出来事の中心的特徴と結びついた想起手がかりが提示された場合には、特定性の高い情報が保持されている階層から検索が開始され、そこから特定性の高い内容が直接に想起されるのだと考えられる（Ball, Mace, & Corona, 2007; Schlagman, Kvavilashvili, & Schulz, 2007, 雨宮・高・関口, 2011）。本研究で用いられた想起手がかりの中にも、参加者によっては上記で説明した想起手がかりが存在しており、これによって特定性の高い出来事が無意図的に想起されたと考えられる。そして、序論で述べた方法論上の問題により特定性の高い出来事のみが報告されたものが先行研究（Berntsen, 1998; Berntsen & Hall, 2004; Schlagman & Kvavilashvili, 2008）であると考えられる。一方、本研究は特定性の高い出来事も低い出来事も偏りなく報告可能な手続きを用いたことで、先行研究では報告されなかった特定性の低い出来事も報告されたと考えることで、先行研究と本研究との結果の違いを説明できるであろう。

このように考えると、本研究の結果および説明は、先行研究（Berntsen, 1998; Berntsen & Hall, 2004; Schlagman & Kvavilashvili, 2008）と必ずしも対立するものではない。先行研究では、無意図的想起は常に特定性の高い情報が保持されて

いる階層から生起すると考えられていたが、おそらくそうではないであろう。日誌法のように日常場面でデータを収集した場合は、様々な想起手がかりから無意図的想起が生起する。このうち、少数の特定の出来事や出来事の中心的特徴と結びついた想起手がかりからは、先行研究のように特定性の高い出来事が想起される。一方、単語のようなさまざまな出来事の記憶に含まれている想起手がかりからは、本研究で報告されたように、特定性の低い出来事が無意図的に想起されるのではないだろうか。もしそうであるのならば、意図的想起と無意図的想起の検索過程の違いは、無意図的想起が想起手がかりによって活性化された情報がそのまま意識に上るのに対し、意図的想起では、同じ想起手がかりを元に能動的な検索が行われる点にあるといえる。

最後に、本研究の問題点として、想起意図の有無の要因に無意図的想起の生起しやすさの個人差が交絡していた可能性が指摘できる。本研究では出来事を想起した実験参加者のデータのみを特定性のデータの分析対象としているが、無意図的想起条件では半数以上の実験参加者が分析対象から除外されている。このことにより、無意図的想起条件では意図的想起条件に比べ、無意図的想起を生起しやすい参加者のデータが多く含まれることになっている。この違いが、実際にどのように特定性のデータに影響を与えたかは、無意図的想起の生起しやすさに関する個人特性がどのようなものであるかが先行研究では明らかになっていないためわからない。今後、無意図的想起の生起しやすさに関連する個人特性および、その性質について検討を行うことで、本研究の結果に参加者の特性の違いが反映されていたのかなどを、慎重に検討していく必要があるだろう。

また、本研究の意図的想起条件では、想起手

がかりから出来事の想起を行っているのに対し、無意図的想起条件では、無意図的想起を誘発するダミー課題として単語の親密性評価課題を行わせている。これに関し、このダミー課題が意味的・概念的な様式の処理を方向付けるものであったため、同じ想起手がかりでも無意図的想起条件のほうが、意図的想起条件よりも、より概括的な内容が想起されたという可能性も考えられる。しかしながら、雨宮・高・関口 (2011) ではダミー課題として意味的・概念的な様式の処理を求めない課題 (音楽の聴取) を行った場合でも、本研究と同様の結果が得られることを示している。このことから、本研究の結果を両想起条件における課題の性質の違いを反映したものであると考えるのは難しい。本研究の結果は、やはりあくまで想起意図の違いが特定性に反映されたものであるといえるだろう。

総括すると、本研究では無意図的に想起された出来事を偏りなく検出可能な手続きを用い、意図的に想起された出来事の特定性と比較した。その結果、意図的想起のほうが無意図的想起よりも特定性の高い出来事が想起された。この結果を元に、意図的および無意図的想起の検索過程の説明を試みた。今後、本研究の説明が妥当なものであるかについて、予測される結果が得られるかなどの検討を通じ明らかにする必要があるだろう。

引用文献

- 雨宮有里・関口貴裕 (2004). 自伝的記憶の無意図的な想起に関する実験的検討 東京学芸大学紀要 第1部門教育科学, **55**, 93-99.
- (Amemiya, Y., & Sekiguchi, T. (2004). An experimental study on involuntary recollection of autobiographical memories. *Bulletin of Tokyo Gakugei University*, **55**, 93-99.)
- 雨宮有里・関口貴裕 (2006). 無意図的に想起された自伝的記憶の感情価に関する実験的検討 心理学研究, **77**, 351-359.
- (Amemiya, Y., & Sekiguchi, T. (2006). An experimental study of the emotional valence of involuntary recolled autobiographical memories. *The Japanese Journal of Psychology*, **77**, 351-359.)
- 雨宮有里・高史明・関口貴裕 (2011). 意図的および無意図的に想起された自伝的記憶の特定性の比較 心理学研究, **82**, 270-276.
- (Amemiya, Y., & Taka, F., & Sekiguchi, T. (in press). Comparison of the specificity of musically cued autobiographical memories. *The Japanese Journal of Psychology*.)
- Baddeley, A. D. & Wilson, B. A. (1986). Amnesia, autobiographical memory and confabulation. In D.C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory*. Malden, MA: Blackwell. pp.225-252.
- Ball, C. T. (2007). Can we elicit involuntary autobiographical memory in the laboratory? In J. H. Mace (Ed.), *Involuntary memory*. Malden, MA: Blackwell. pp. 127-152.
- Ball, C. T., Mace, J. H., & Corona, H. (2007). Cues to the gusts of memory. In J. H. Mace (Ed.), *Involuntary memory*. Malden, MA: Blackwell. pp.113-126.
- Berntsen, D. (1996). Involuntary autobiographical memories. *Applied Cognitive Psychology*, **10**, 435-454.
- Berntsen, D. (1998). Voluntary and involuntary access to autobiographical memory. *Memory*, **6**, 113-141.
- Berntsen, D., & Hall, N. M. (2004). The episodic nature of involuntary autobiographical memories. *Memory & Cognition*, **32**, 789-803.
- Brewer, W. F. (1986). What is autobiographical memory?. In D.C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory*. Cambridge University Press. pp.25-49.
- Conway, M. A. (2005). Memory and the self. *Journal of Memory and Language*, **53**, 594-628.
- Conway, M. A., & Pleydell-Pearce, C. W. (2000). The construction of autobiographical memories in the self-memory system. *Psychological Review*, **107**, 261-288.
- 神谷俊次 (2003). 不随意記憶の機能に関する考察—想起状況の分析を通じて 心理学研究, **74**, 444-451.
- (Kamiya, S. (2003). Some observations on the functions of involuntary memory: An analysis of the circumstances surrounding occurrence. *Japanese Journal of Psychology*, **74**, 444-451.)
- 神谷俊次 (2008). 日誌法を用いた自伝的記憶研究. 佐藤浩一・越智啓太・下島裕美 (編著) 自伝的記憶の心理学 北大路出版 pp.33-46.
- (Kamiya, S.)
- 佐藤浩一 (2008). 自伝的記憶研究の方法と収束の妥当性. 佐藤浩一・越智啓太・下島裕美 (編著) 自伝的記憶の

心理学 北大路出版 pp.2-18.

(Satou, K.)

Schlagman, S., Kvavilashvili, L., & Schulz, J. (2007). Effects of age on involuntary autobiographical memories. In J. H. Mace (Ed.), *Involuntary memory*. Malden, MA: Blackwell. pp.87-112.

Schlagman, S., & Kvavilashvili, L. (2008). Involuntary autobiographical memories in and outside the laboratory: How different are they from voluntary autobiographical memories?. *Memory & Cognition*, **36**, 920-932.

Smallwood, J., & Schooler, J. W. (2006). The restless mind. *Psychological Bulletin*, **132**, 946-958.

Williams, J. M. G., & Broadbent, K. (1986). Autobiographical memory in attempted suicide patients. *Journal of Abnormal Psychology*, **95**, 144-149.

注

- 1 本研究では想起意図の有無により 2 つの想起形態を区別しているため、意図的想起と無意図的想起という用語を用いた。なお、神谷 (1998) は無意図的想起ではなく不随意記憶という用語を使用している。